2012年度第1回法人研修会

３年以上職員研修発表原稿集

テーマ　　『私の職場での工夫と改善、その評価』

【発表者】

八木　小百合　　下田部保育園(保育士)

栗生　麻由子　　下田部保育園(保育士)

下　絵美　　　　地域生活支援センター光(生活支援員)

中村　奈緒子　　下田部保育園(保育士)

加藤　里奈　　　下田部保育園(保育士)

以上5名(発表順)

2012年10月1日(月)18:30～

地域生活支援センター光3階ホール

新入園児を受け入れる際のクラス担任としての対応について

下田部保育園

保育士　八木小百合

１.　　はじめに

わたしは、１年目５歳児、２年目２歳児、３年目０歳児、４年目の現在は１歳児の担任をしています。毎年、年度初めの４月や、また年度途中にもクラス

に新入園児が入園してきていました。新入園児は初めて親から離れる場合や、

はじめて集団生活を経験する場合など、たくさんの不安を抱えています。そん

な中で、新入園児が安心して毎日の保育園生活を送れるよう、関わってきまし

た。また、新入園児がクラスに入ることで、在園の子どもたちが不安に感じる

こともありました。その点もふまえ、新入園児が入園した際、クラス担任とし

て子どもたちとのかかわり方について工夫・改善してきたことにっいて発表し

たいと思います。

２.　　一年目　～自閉症児との関わりを通して～

１年目、はじめて担任したクラスに、うの花療育園からの転園である自閉症

のＭ君が新入園児として入園してきました。自閉症の特性上、集団生活や、初

めての環境がとても苦手であり、はじめのうちは、部屋に入ることも難しく、

園庭に飛び出したりしていました。私自身、はじめての保育士生活、どうした

らよいのかわからなかったものの、クラス担任の協力もあり、Ｍ君との２人の

時間をたくさんとり、落ち着いたらお部屋に入るようにしていきました。そう

した関わりの積み重ねの中で自然とお友達とお部屋で遊ぶことができるように

なったり、お友達と一緒にトイレに行く経験の中で、オムツが外れたり、お友

達と一緒の机で給食が食べられるようになる中で、偏食傾向にあった食事も、

なんでも食べられるようになったりと、たくさんの成長を見ることができまし

た。この一年間を通して、一対一の関わりを大切にしながらも、子どもは集団

において学びを得ることが出来るということを学びました。

３.　二年目　～外国籍の園児との関わりを通して～

２年目は２歳児の担任になり、４月の時点で８名の新入園児が入り２８名でス

タートしました。また途中入園の子が数名ずつ増え、最終３３名のクラスとな

りました。無認可保育園からの転園の子が多かったこともあり、また前年度に

学んだ一対一の関わりを大切にしていくことで、集団生活にスムーズに入れる

子が多いクラスでした。そんな中、中国国籍のＲちゃんが途中入園で入ってき

ました。日本語が通じず、～所懸命に何かを伝えようとしてくれているＲちゃ

んの言葉を理解してあげることができませんでした。急に泣き出すＲちゃんの

気持ちもわかってあげられず、こちらの声掛けも通じないため、関わり方が難

しくクラス担任全員で頭を抱える毎日でした。しかし、言葉が通じないという

先入観が、Ｒちゃんとの信頼関係の構築をさまたげているのではないかと気付

いてからは、積極的に話しかけ、またご両親とのコミュニケーションも大切に

していく中で、時にはＲちゃんと私達の間に入って通訳をしてもらうことで、

Ｒちゃんの気持ちを理解できるようになり、Ｒちゃんの笑顔が次第に増えてい

きました。また、一年の間にたくさんの日本語も話せるようになり、会

話でのコミュニケーションもとれるようになっていきました。

４.　　三年目　～Ｔ君との関わりを通して～

３年目は０歳児の担任になり、全員が新入園児というクラスでした。月齢の

低い子が多く、０歳児の担任が初めてだったこともあり、当初は月齢の高い子

たちと多く関わりをもっていました。そのためか、５月生まれのＴ君が私に信

頼を寄せるようになっていました。この年、８名でクラスがスタートしたので

すが、最終１８名に至るまで、毎月のように新入園児が入っていました。

そんな中、ある新入園児が入った月、Ｔ君が不機嫌になることが増え、はじ

めは体調が悪いのだろうと数日、見守っていました。しかし、一向に機嫌は直

らず、どうしたのだろうと思っていたある日のこと、わたしがＴ君の隣で泣い

ている新入園児を抱き上げようと近づいた際、Ｔ君は自分が抱っこしてもらえ

るものと思い、手を伸ばしました。しかし、わたしは泣いていた新入園児を抱

き上げました。すると、Ｔ君が大きな声で泣き始めました。「ごめんね。」と声

をかけ、新入園児を抱きながら、もう一方の手でＴ君を抱きました。するとＴ

君はすぐに泣き止んだものの、そのままわたしの肩に思い切り噛み付きました。

その瞬間、わたしだけでなく他のクラス担任もＴ君の機嫌の悪さは、体調不良

からくるものではなく、新入園児に対し、やきもちを妬いていたためだと気付

きました。それからは、他の担任の協力もあり、Ｔ君と一対一で関わる時間を

多く持つことで、Ｔ君の笑顔が戻り、機嫌よく１日を過ごせるようになりまし

た。

そんなＴ君が、年末年始の連休が明けた１月初旬、また不機嫌になることが

増えました。連休明け、生活リズムが崩れ、泣くことが増える子が多くいるた

め、Ｔ君も連休明けだからだろうと考えていました。しかし、ほかの子たちが

生活リズムを取り戻していくなか、Ｔ君だけは、なかなか生活リズムを取り戻

せていないように感じていました。そんなとき、ふとＴ君に噛まれたときのこ

とを思い出し、１月からも新入園児が入っていた点にも気付き、以前の状況に

似ているのではないかと担任で話し合いをしました。クラスの子どもの人数が

増えている中、一対一で関わる時間をとることは容易ではありませんでしたが、

クラス担任の協力のもと、Ｔ君と一対一の時間を作ってもらえることになりま

した。すると、とても嬉しそうな表情を浮かべる丁君。すぐに機嫌を治してく

れました。この一年間で、新入園児に対する関わりばかりに目を向けるのでは

なく、在園の子どもたちに対しての関わりも大切であるということを学びまし

た。

５.　　４年目　～集団生活に慣れづらいＹ君との関わりを通して～

４年目の今年は、昨年度担任していたクラスを引き続き持ち上がりで担任を

することになりました。４月から１０名以上の新入園児が入ることも決まり、

新入園児に対する関わりも大切にはなりますが、わたしは持ち上がりというこ

とで、新しい部屋、新しい担任の顔ぶれに不安を覚えるであろう、在園の子た

ちとの関わりを中心に、新しい担任に新入園児をお任せするという形をしばら

くの間とることにしました。前年度、新入園児が入る度に不安定になっていた

Ｔ君でしたが、一対一で関わってあげることは出来なくても、「ちゃんと見て

るからね。」という気持ちが伝わるよう、声をかけるようにしたり、お迎えが遅い子であったため、他の子が降園したあと、二人で遊ぶ時間を作ったり工夫することで、大きく不安定になることはありませんでした。

そんな中、４月の入園当初から毎日、一日中泣き続けているＹ君がいました。

担任全員でどうしてあげたら良いものかと連日話し合いを重ねながらも、時間

が解決してくれるだろうと考えるほかありませんでした。しかし５月に入って

も一向に泣き止むことはなく、担任が代わる代わる抱っこをし一日を過ごすと

いう日々を送るしかできずにいました。「なんで泣くの？」とイライラがつのってしまうこともあり、どう関わってあげたら良いものかと悩む毎日でした。大きな声で泣き続けているため午睡の時間は、部屋を連れ出し、少しでも機嫌が治ればと園内をうろうろする毎日でした。ある日、年長クラスの保育士の姿を見て、Ｙ君がその保育士に抱っこを求めました。わたしのイライラした気持ちがＹ君に伝わってしまっていたのかもしれません。心穏やかに抱っこしてくださる保育士に抱かれ、そのまま眠りについたＹ君の姿を見て、「何をわたしはイライラしていたのだろう…Ｙ君が一番しんどいのに…」と気付き、そのことをきっかけに、とことんＹ君に付き合っていこうと決めました。今まで、抱っこに疲れたら、別の担任が抱っこを代わっていましたが、Ｙ君にとっては、やっと安心できたところに、また違う人に代わって不安…という悪循環になっていたのではないかと考え、担任全員の協力のもと一週間徹底的にＹ君と関わることにしました。Ｙ君の登園時間に合わせ出勤し、お迎えが来るまでずっとそばにつき、毎日保護者とのコミュニケーションも大切にしていきました。すると、抱っこでほんの少ししか食べられなかった給食も、椅子に座り自分でしっかりと食べられるようになったり、ほんの少しではありましたが、抱っこから降りて遊べるようになったり、抱っこで数十分しか眠れなかった午睡も、お布団で一時間程度は眠れるようになったりと、一週間の徹底的な一対一関わりの中で、大きな成長が見られました。そして、ついに園庭に出ると笑顔で走りまわれるようになりました。その姿を見たときに、集団の中においても、やはり一対一の関わりが、大切になるということに改めて気付くことが出来ました。

その後も密な関わりを大切にする中で、時間はかかりましたが、現在は、一日中笑顔で過ごせるようになったり、布団で横になり入眠できるようになったりと、ゆっくりながらもＹ君なりのペースで集団生活に慣れてきています。

６．　最後に

この４年間、いろんなクラスを経験する中で、年齢によっての違いはもちろ

んのこと、やはり一人ひとりの違いをしっかりと理解し、寄り添い、集団の中

でも一対一の関わりが大切であり必要である場合があることに気付きました。

そのためには、複数担任における連携が不可欠であり、また自分ひとりの意見

だけにこだわらず、相談しあいながら、より良い援助を工夫していくことが必

要であり、子どもの成長に合わせ改善していくことも大切だと感じています。

まだまだ、子どもとの関わりについて悩む事もありますが、これからも保育の

プロとしての自覚を持ち、子どもたちとともに私自身も成長していきたいと思

っています。

参考文献

「心の保育を考えるCase6　7」　　ラポム編集部編

＜トイレトレーニングを通して＞

下田部保育園

保育士　栗生　麻由子

『はじめに』

私が下田部保育園の職員となってから、今年で4年目を迎えました。1年目、

2年目、3年目と1歳児、そして今年4年目には0歳児の担任をさせて頂いてい

ます。元々私は小さい子どもが好きで、保育士になったら乳児クラスを持ちた

いと思っていたため、1歳児クラスと決まった時は、とても嬉しかったことを覚えています。しかし、こうして3年間、1歳児クラスを経験し、改めて振り返ってみると、実際は非常に難しく、大変だった―――その分、やりがいはひとしおだったと思っています。

皆さんの中には、「1歳児」と聞くと、赤ちゃん赤ちゃんした姿を想像される

方も多いと思います。実際私もそうでした。大人が全て身の回りのことを世話

してあげなければならない――そう思っていました。しかし、実際の1歳児は、

大人が想像するよりも、遥かに好奇心や探求心が旺盛で、自立に向けて懸命に

背伸びしようとしている時期なのです。食事や排泄、睡眠や手洗いなどの清潔

を保つ行動、衣服の着脱など、基本的な生活の多くを自分でやりたがるように

なります。私たち保育士に出来ることは、そうした子どもの自我の芽生えを、

しっかり受け止めつつ、基本的生活習慣の自立を手助けすることだと思ってい

ます。今回の発表では、その中の「排泄」に着目し、排泄の自立のために私た

ちが行なってきたこと、「トイレトレーニング」について、述べさせて頂きたいと思っています。

『トイレトレーニングの始め方』

そもそもトイレトレーニングとは、「おむつを常時使用している状態から、自

分の意思で、一般のトイレで排泄できるようにすること」を言います。始める

時期は人によってバラバラですが、まずは、お座りが安定すること。オマルに

座っていて倒れそうになったり、フラフラしたりと、不安定では、トレーニン

グは困難です。そして、もう一つ大事なことは、オマルに対して興味をもつこ

と。座るのを嫌がっているのに、無理やり座らせては、子どもにストレスとな

り、ますます排泄への興味を無くしてしまいます。

私が受け持ったクラスでは、すでにトレーニングを始めてくださっていたご

家庭もあり、保育園のオマルに抵抗なく座ることができました。その一方で、

全くトレーニングをしていないご家庭もありました。

Ｔくん(1歳7ヶ月)の場合は、動き回ることが大好きで、オマルに座らされるのを激しく嫌がっていました。子どもの立場になって考えると、衣服を脱いだ状態で長時間拘束されるわけですから、嫌だという気持ちもわかります。

そこで私たちは、最初のうちは、オムツが濡れていたら替えるだけにし、替

える場所をなるべくオマルに座っている子どもの近くで行うことにしました。

また、オマルの置いてあるトイレトレーニングルームにキャラクターの壁紙を

貼ったり、可愛い便座カバーをつけたりし、場所自体に興味が持てるような環

境作りをしました。そうすることで、次第にＴくんは、オマルに関心を示し、

座ることを拒まなくなり、自分からオマルに座りに来るようになりました。ト

イレトレーニングの第一歩の合図でした。

『排泄の感覚を掴むまで』

Ｔくんのようにオマルに関心を示すようになり、座るようになったものの、オ

マルに乗りながら車のように床を踏み鳴らして遊んだり、座った瞬間、立ち上

がって戻って来たりする子も目立つようになりました。前者の場合は、「ここは遊ぶ所じゃないから、終わってから向こうで遊ぼうね」と言い聞かせて直していくようにしましたが、後者の場合は、本当に出ないのか、本人の中で、座ったことで満足しているのだけなのか判断がつきにくかったため、子どもが脱いだオムツを見て、濡れているかいないかで、判断することにしました。濡れていれば、オムツの中で排泄したということなので、すぐに立ち上がっても仕方がないものとし、反対に濡れていなければ、もう少し頑張って座ってみようと促すようにしました。その際も、決して無理強いはせず、「シーシー」と尿意を引き出す声かけをしたり、出なかったとしても、咄なかったの。大丈夫、次頑張ろうね」と励ましたり、「いっぱい座れたね、偉かったね!」と座れたことを褒めたりし、ネガティブな表現は慎むようにし、前向きに、子どもが自信を持てるような声かけをするように心がけました。

それらの事を繰り返し行なっているうちに、それまで全く出なかった子がオ

マルでの排泄に成功した時は、自分のことのように嬉しく、その子も、喜んで

いる担任たちの姿を見て、嬉しそうな、誇らし気な顔を見せたことが、とても

印象に残っています。

『トレ一ニングパンツ持参の声かけ』

オマルで出る回数が多くなっていったら、今度はいよいよトレーニングパン

ツ着用開始です。保護者の方にそろそろ始めてみましょうかと声かけをし、ト

レーニングパンツを、数枚持参してもらいます。もちろん、突然持ってきてく

ださいと声かけするわけではありません。それまでに日々の排泄の様子を保護

者と担任の間で伝え合い、情報を共有しあった上で、声かけをします。ちなみ

に、一般的には排泄の感覚が長くなり、パンツを濡らしたとしてもすぐに乾く

夏場に持参してもらうことが多いそうですが、クラス全員の子どもを一度にト

レーニングパンツに替えることは、一日の生活がトイレトレーニング中心にな

ってしまい、子どもたちと遊ぶ時間がなくなってしまう恐れがあります。そこ

で私のクラスでは、

・排泄の感覚が長く、30分以上はもつ。

・脱いだオムツが濡れておらず、オマルに座るとほぼ成功する。

この二つの条件を大まかな目安とし、満たしている所にトレーニングパンツを

持参してもらうよう声かけをすることにしました。

『トレーニングパンツ着用』

トレーニングパンツを持参してもらったらいよいよ着用開始です。分厚めの

しっかりしたものからキャラクターや可愛い模様の様々な種類のものに、子ど

もも嬉しそうに着用していました。このまま順調にトレーニングも進むだろう

と思っていたのですが、現実は困難なことが沢山ありました。

まず、紙パンツから布パンツへと変わり、肌触りに大きな変化が生じたこと

で、お漏らしする子が増えたこと。それまでは一定間隔で出ていた子が、布パ

ンツに変えた途端、間隔が不規則になってしまい、パンツを濡らしてしまうこ

とが多々あったのです。私は、「今までずっと成功していたのにどうしてだろう」と悩み、漏らしたまま遊び続けている子に対し、「出たんだったら教えてよ」「呼んでもすぐに来ないからでしょう」などと言ってしまった時もありました。

そのせいで、子どもは余計オマルを嫌がるようになり、お漏らしすることもま

すます多くなるという悪循環に、一時期は陥ってしまいました。そのような時

期に、ある先輩にアドバイスをもらいました。

「最初のうちは誰でも失敗するのは当たり前。先生がそんなに頑張り過ぎたら、

子どもも疲れちゃうからゆっくりやっていこう」

この言葉を聞き、私は今までいかに自分の言動が子どもにストレスを与えてい

たかを思い知らされました。よくよく考えてみると、子供自身、布に変わった

ことで濡らしてはいけないというプレッシャーが自分を追い込み、そのせいで

間隔が定まらなくなってしまったのだと思います。それからは子どものペース

に合わせ、子どもがストレスを感じないよう楽しい雰囲気で排泄ができるよう

な言動を心がけるようになりました。

まず子どもがオマルに行くのを嫌がる最も多い理由はおもちやで遊んでいる

途中で行くことで、座っている間に他児におもちゃを取られてしまうことを危

惧しているから。そこで、私たちは、おもちゃを一緒に持っていき、他児が取

れない高さの場所に置いておくことにしました。そして排泄後はきちんとその

子におもちゃを返し、「偉かったね!○○ちゃんが賢く座っていたからおもちゃ

が待っていてくれたよ」などと褒める。そのことを繰り返すうちに、子どもは

遊びに集中している最中でも、オマルに嫌がらずに来てくれるようになりまし

た。そして、前回の失敗を踏まえ、例え漏らしてしまったとしても、「オシッコで濡れて気持ち悪かったね。次はオマルでできるように頑張ろうね」と励ますような言葉がけをするよう工夫しました。それらを続けていった結果、それまでは漏らしても何もなかったかのように遊び続けていた子が、漏らした際にその場でじっと固まって動かなくなったり、パンツを下ろすようになったり、ソワソワしたりと明らかな成長が見られるようになりました。

『トイレトレーニングの個人表』

トレーニングパンツの子が増えてきたら、どの職員が見ても排泄の状態が一目

でわかるような1週間分の個人の表を作ることにしました。職員間でトイレ担

当を毎日二人定め、見る子どもを半分に分け、自分の担当の子どもたちの表を

見ながら、オマルに誘うようにしていきました。1週間分のデータを残すことで、その子が大体毎日どれくらいの間隔で排泄しているかがわかりやすく、そのデータをもとに誘っていくと、だんだんと子どもたちの排泄の間隔も安定してきて、呼ばれる前にオマルに行く子どもも増えていきました。

『終わりに』

排泄というのは一番人間にとって基本的な行為でありながら、自立が一番難し

い行為です。大きくなるにつれ、当たり前のように備わっていく排泄の自立も、

私たち大人の援助なしでは成し得ないことだと思っています。しかし、最も大

切なのは子ども自身がやる気になることです。これまでのトイレトレーニング

を通して私は、焦らず頑張りすぎず、子どもの現状を受け止め、持っている力

を信じることが大切なのだと気づかされました。トイレトレーニングに限らず、

これからどんな場面でも、子どもの気持ちに寄り添える、そんな保育をしてい

きたいと思います。

【参考文献】

・「新版資料でわかる乳児の保育新時代」

『私の職場での工夫と改善、その評価』

安定した日常生活を支援するために

地域生活支援センター光

生活支援員　下　絵美

はじめに

私は地域生活支援センター光の開所と同時に正職員として働きはじめて6年

目になります。その間、2度出産のためにお休みをいただいたり、また事務員と

して働かせていただいた時期もあります。今回の職場復帰後は、生活支援員と

して3年振りに介護職へ復帰しました。現在配属している星ユニットは、入所

者が8名で入所3ユニットの中では1番小さなユニットです。脳性まひの方や

脳梗塞のために障がい者となられた方など多岐にわたり、また年齢層も下は26

歳から上は69歳と少人数ながらもさまざまなご利用者がいらっしゃいます。

今回は、日常生活の中でも重要な支援の一つである排泄介助について発表さ

せていただきます。

〈排泄の仕組み〉

まずは、排泄(排便)の仕組みについて簡単に説明します。

「食べ物は口で咀噛し、固形物を飲み込みやすい状態にして食道から胃へ送

られます。胃で食べ物を混ぜ合わせ、胃液で一部を消化・吸収します。さらに

小腸へ送られ、小腸(十二指腸・空腸・回腸)で栄養分・水分を消化・吸収し

ます。そして、大腸へ送られます。大腸(結腸・直腸)で食べ物のカスや腸内

細菌などが混ざり、便になります。大腸の基本運動(ぜん動運動)で直腸へと

運ばれて行きます。そしてある程度便がたまると便意をもよおします。」(リブ

ドゥコーポレーションのサイトより引用)

「排泄は、身体にとって有害で不必要な老廃物質を体外に出すという生理現

象の一つで生命を維持する為にはなくてはならない行為です。生活の中で都合

のよい時間に、規則的に、スムーズに排泄し、腹部がすっきりするという排泄

習慣を身につける事が大切です。」(YSウェブより引用)

〈排泄のために必要なこと〉

上記のように、排泄物は飲食の結果ですので水分や食事の内容が大きく関係

しています。

水分摂取量は尿や便にとってとても重要なものです。1日の水分摂取量は、食

事から約800cc程度の水分が体内に吸収されますが、それとは別に約1000～

1500ccの水分摂取が必要とされています。

食事については、便を気持ちよく排泄するためには、一定量をしっかりと食

べることも大切です。栄養バランスや繊維の多い食品も必要です。排便の周期

は個人差がありますが、摂取してから24～72時間で排便されるのが普通です。

次に重要なのは、姿勢です。寝たきりの状態では便が直腸に降りてきても、

内肛門括約筋に重さとして伝わりにくいため排便反射が起こりにくくなります。

また、重力を使って力むことができにくいため便が出せません。まずは体を起

こし、便意を感じている時に力んで横隔膜を下げ、腹圧を上げて便を押し出す

ことが必要です。

〈事例>

Ａさん(男性・40代)のケース

Ａさんは光へ入所して約2年、その前はショートステイで毎週利用されてい

ました。私はＡさんがショートステイで光を利用されている時期は、育児休業

中や復帰して事務所で働かせていただいていたためほとんど面識がありませ

んでした。今回、生活支援員として復帰してから初めて関わるご利用者です。

脳性まひがありますが、電動車いすを使用されています。食事や移動、レクレ

ーションへ参加される時は車椅子を使用されますが、普段は居室で、1日の大

半を横になった姿勢で組み紐をされたり歌を歌ったりして過ごされています。

Ａさんには、小さな出来事でも気にしてしまう繊細な一面があります。他

のご利用者に「通るから、ちょっとどいて。」と言われた時も、「きつく言わ

れた」と落ち込んでしまうことが時々あります。落ち込んでいる時は、頭を

テーブルに打ち付ける自傷行為が見られたり、表情も暗く不穏状態になりま

す。また少し思い込みの強い部分もあり、1年を通してとても機嫌のいい時

期、落ち込みやすい時期があります。すぐ表情に表れるので、落ち込んでい

る時はいつも以上にお声をかけるようにしています。

【これまでの排泄習慣】

Ａさんは、以前は少量ずつオムツ内に排便していました。1日中、少しず

つ出ている状態です。ところが、今年3月に便秘傾向が強くなり、それと同

時におう吐する日が増えました。血液混じりのおう吐があったため、緊急通

院しレントゲンを撮ったところ腸内に多量の便があり、そのために胃が食べ

物を受け付けない状態になっていたことが判明しました。

Ａさん自身は、「食べ物で改善したい。薬は飲みたくない」という気持ち

が強く、「これからは水分をあまり摂らない。食べ物も減らす」と言うので、

それでは逆効果になることと、今までの排便習慣では良くないことを説明し

ました。

【便秘改善に向けて】

その当時、Ａさんが摘便を希望されたので、看護師が摘便を行うが取りき

れず、またご本人が思った以上にしんどかったようで「もう摘便はしたくな

い」とのことで中止したことがありました。なかなか便秘が改善されなかっ

たので、次に座薬を試みましたが、多量の便の中に座薬が入り込んでしまい

効果が薄れたこともありました。そのため、緩下剤を服用して様子を見るこ

とにしました。

次に、正しい姿勢を取ることで排便がスムーズに行えるかもしれないと考

え、トイレチェアを試してみました。トイレチェアは、脳性まひなどの障が

いのために便座での座位保持が難しい方のための介護用品です。体の前面に

転倒防止・姿勢保持用のバーやテーブルをつけることができたり、肘置きが

ついていたり、またキャスターがついていて車いすや簡易ベッドからの移乗

がしやすいので、光では各フロアで使用しています。Ａさんにトイレチェア

を試していただいたところ、緊張のためか顔がこわばり力むこともできませ

んでした。医学的には「正しい姿勢」でも、40年以上「トイレに座る」とい

う経験がなかったＡさんにとっての「排泄する姿勢」ではなかったようです。

また本来なら正常といわれる便の固さでは自力で排泄できないので、軟便の

状態で排泄されています。これも今まで横になった姿勢で少しずつ排泄され

ていたため、「腹圧をかけて力む」ことができないからです。そのため、こ

れまで通り排泄は横になった姿勢で、尿瓶介助と排便はオムツ内に出すこと

にしました。

今までと同じ姿勢で排泄を行うことは、Ａさんにとってリラックスして排

泄ができるために重要なことだとわかりました。旅行中は緊張してなかなか

排便ができず便秘になる方もいますが、リラックスしてゆったりした精神状

態であることもスムーズに排泄を行うためには必要でした。

【その後の経過】

４月に入るとおう吐がなくなりました。３月のおう吐以来胃に負担をかけ

ないようにと中止していた缶コーヒーを、Ａさんの強い希望もあり1日1本

飲むことにしました。併せて、以前から食事中でもあまり飲まれなかった麦

茶をもっと飲むように促しました。それでもなかなか1日の水分摂取量が増

えないので、医師からも水分をよく摂るように伝えていただきました。

5月には、５～７日に1回くらいの排便ペースになりましたが、長く排便

があいている時は、涜腸をして多量に出すことで便秘改善を促しました。し

かしＡさんが「涜腸や座薬は嫌だ。」とのことだったので、服薬と水分摂取

量で調整してみることにしました。特に、水分摂取に関しては、300cc(麦

茶) × ３　(毎食) + 100cc (緩下剤用)と、他に缶コ一ヒー１日２本と食

事の汁物で摂取することをＡさんと取り決めました。Ａさんも納得された様

子で、食事形態はプリン食ですが、「汁物は普通の汁の状態をストロ一で飲

む」とご自分から提案されたり、1回分300ccを飲み終えると「飲んだよ」

と教えてくださったりと積極的に水分を摂るようになりました。

６月には、２週間にわたり毎日排便があったので看護師と相談し、緩下剤

の服用を中止してみました。Ａさんにも「お薬を減らしてみましょう」とお

話しした途端に、今まで快調だった排便がなくなってしまいました。緩下剤

の中止＝排便しなくていい(排便しない)と、気持ちの方が思いこんでしま

ったのではないか、と推測しました。6月末から再度緩下剤を再開しました。

今は、5月以前に比べ尿量が増え、２～３日に1回の排便があります。時

には毎日出ることもあり、また、1回ですっきりと出ることも多くなりまし

た。ただし、3日以上排便のない時は4日目辺りで看護師と相談して洗腸を

行っています。

【今後の課題】

課題は、Ａさんの「食べ物で改善したい」という気持ちと食習慣だけでは

実際に改善できない状態である時に、どのように励ましていくかです。今は、

排便があった時に「良かったですね、すっきりしましたね。その調子でいき

ましょう」とお声をかけていますし、排便があった朝はニコニコしながらＡ

さんの方から「出たよ」と教えてくださいます。また、週末に出かける方な

ので「外出日までにすっきりできたらいいですね」と楽しみのためにがんば

ろうと、話をしています。排便習慣に限らず今後の日常生活において、ご本

人の気持ちと実際の問題とのギャップをどのように埋めていけばいいか、妥

協点を見つけながら改善できるよう支援ができたら、と思います。Ａさんの

精神面でも、スムーズに排泄を行えることで自信につながり、それによって

日常些細な出来事に落ち込まないで過ごせるような支援ができたらと思いま

す。

8月には新しいユニットリーダーが配属になり、また今まで通所デイサー

ビスと合同で日中活動を行っていたのが星ユニット単独で日中も過ごすよ

うになるなど、星ユニット全体の日常生活が変化してきました。この変化に

対応しながらAさんとの信頼関係を築き、精神的にも安定した日常生活が送

れるように支援していきたいです。

【参考文献】

・基礎から学ぶ介護シリーズステップアップのための排泄ケア

西村かおる・著中央法規出版(株)

「特別配慮食から見えてきた保護者対応」

下田部保育園

保育士　中村　奈緒子

[はじめに]

アレルギー児の増加に伴い、特別配慮食を必要とする子どもたちが年々増え

てきています。特に今年度の1歳児はクラス数28名に対しアレルギー児が7名

とアレルギー児の割合が高く、またアレルギーの種類も1人ひとりで異なる為、

配膳等の慎重な配慮が必要となっています。そんな中、アレルギーを持ってい

るのではないけれども特別配慮食を必要とするお子さんが出てきました。今年

度クラスリーダーとして1歳児の担任をさせていただく中、食事に対して保護

者と話をする機会が例年以上に増えています。そこで、食事について、また保

護者とのコミュニケーションの大切さについて再確認し、振り返ったことにつ

いて発表させていただきたいと思います。

[事例～丁君について]

T君は3人兄弟の末っ子です。1歳0ヶ月で保育園に入園しました。入園当初の

数日の間は給食を希望されずお弁当を持参して来られました。食事の除去につ

いて保護者と栄養士が話し合った結果、丁君自身にアレルギーはないけれども、

兄にアレルギーがあったこと、また、添加物を含む加工品が入った物は3歳ま

では一切食べさせたくないため、給食の普通食は食べさせたくないとの保護者

の希望があり、保育園では後期離乳食を提供することになりました。おやつに

関しては保存料等が含まれない赤ちゃんせんべい以外のお菓子類は提供しない

ことになりました。そして、今年度1歳児クラスになり、私が担任として関わ

らせていただくことになりました。

～経過～

4月はまだ咀囎がしっかりできないというお子さんが他におられ、T君以外に

も離乳後期食を希望される方がいました。また、0歳児から1歳児へと新しい

環境に移ったということもあり、丁君は他児と自分の食事の違いには気付かず、

何の抵抗もなく給食やおやつを食べていました。しかし、5月に入り、普通食と比べて柔らかい離乳後期食ではほとんど咀噛することなく飲み込めてしまうため、満腹感が得られず、すぐに食べ終わってしまうことが増えてきました。また、おやつでは他児の物と自分の物との違いに気付き、T君におやつを渡すとおやつを投げて怒るという場面も頻繁に出てくるようになりました。そこで保護者に保育園での食事の様子について話をしてみることにました。

6月の第1土曜日に保育参観があります。実際にT君の食事の様子を見ても

らいながら厨房職員を交えてお話しが出来ればと考えていたのですが、保護者

の都合がつかず参観は欠席になりました。その為、保育園でのT君の姿を保護

者に見ていただくことなく送迎時にお話をすることになりました。

給食の状況、咀囑のことやそれに伴うあごの発達について、咀噛することで

得られる満腹感について等お伝えしたところ、最近家でもチーズなど保護者が

食べさせたくないと思っている物を兄が理解できずに丁君に渡してしまい、食

べてしまうことが多々あることをおっしゃられ、T君自身もそういう物を欲し

がることがあること、いつまでも離乳食で柔らかい食事のままだといけないと

思い固い物も食べていることなどを話されました。

話し合う中で、

①3歳までは体の色々な部分が出来ていく時期。だから、保存料など添加物の

入ったもの物は食べさせたくない。

②3歳までの時期は体の発達においてとても大切な時期。だから、何が良いか

何が悪いかを自分で考え、選択できるようになるまでは私がきちんとやって

あげたい。

③本当は母がお弁当を作りたいのだが、それをするのはしんどい。

という保護者の気持ちもお聞きすることが出来ました。

お互いに話し合っていく中で、普通食にはパン、揚げ物、果物の缶詰等保護

者が好まない食べ物が含まれる為、すべてを普通食にすることには抵抗はある。

しかし、塩、砂糖、だし等の加工調味料ではない物で味付けされた物に関して

は妥協しないといけないと思っているという気持ちを最終的に話されました。

～取り組み～

一部でも普通食を食べることができる様に、普通食の食材が書かれた献立を

事前に保護者にお渡しして、普通食が食べられる日には○、食べられない日に

は×を記載して頂くことになりました。しかし、献立をチェックして頂くと保

護者が○をしたのは土曜日の1日のみでした。丁君は土曜保育を毎回希望され

るのではない為、結局1回も普通食を食べないことになってしまう可能性があ

ります。これではせっかく母の気持ちが普通食へ向ってきているのにも関わら

ず普通食が食べられないことになってしまう為、厨房職員と相談をして、ユ日

の献立ごとにチェックして頂くのではなく、1つ1つの料理晶目に○、×を記

載して頂き、厨房でT君用に離乳後期食と普通食の両方を用意してもらい、ク

ラスで保護者に書いて頂いた献立を見ながら配膳してくことになりました。そ

の結果、普通食として食べられるものが増え、早食いもなくなり、しっかり噛

んで食事をすることが出来るようになり、満腹感も得られるようになりました。

～連絡ノートでのやり取りについて～

ある日、家で自分の食事には目もくれず、兄たちの食事を欲しがり揚げ物を

食べてしまった。食べる意欲としては良いけれども…という内容を保護者が連

絡ノートに書いてこられました。食事に関して話をする良い機会だと思い、お

兄ちゃん達と同じ物を食べたり同じことをしたい時期なのですね。保育園でも

おやつ等お友だちとの違いに気付いてこれとは違うと食べ物を投げてしまいま

す。自分の事だけでなく周りの事も良く見ていますね。という内容のお返事を

書きました。翌日のお返事の連絡ノートに「おともだちと違う」という疑問を

持つこと、そのことを認識することは大事な事で、みんなと同じである言いか

えれば人と違う事を認識することも大事だと思う。「何を大事にしているか」を考えて育んでほしいと思っているという内容が書かれていました。

翌日、お迎えに来られて連絡ノートでのやり取りについて直接お話すること

ができました。保護者は連絡ノートに対して気にしておられる様子はなく、「特に何も思っていないけれど何の事でしょう?ノートを読みかえしてみます」という答えが返ってきました。翌日の連絡ノートに周りに影響されず自分らしく成長して欲しいという願いを書いたつもりだった。園の先生には良くしてもらって感謝しているし、連絡ノートに書かれている1日の様子を読むことで、仕事の疲れも忘れるほど楽しみにしている。という事を書いてこられました。

保護者に少しでも他の園児の食事に近付けて欲しいという思いが先行してし

まい、気持ちに添わないお返事をしてしまったなと連絡ノートを見て反省しま

した。まずT君の違いがわかるようになったという成長に対しての喜びを伝え

ることが大切で、食事に関してはまた別の機会に話し合えば良かったと反省し

ました。また、連絡ノートでのやり取りのむずかしさ、直接話し合うことの大

切さ等を改めて感じました。

[終わりに]

T君の食事に対して、集団で生活する中でアレルギーではないのに特別な配

慮を必要とすることに若干の抵抗がありました。その気持ちが保護者と話した

り、ノートで連絡を取り合う時に現れていたと思っています。こちらの思いを

伝えるよりも、まず、保護者の思いをしっかりと受け止め、気持ちに寄り添っ

ていくことが大切であり、保護者の気持ちをしっかり受け止めた上で思いを伝

え合っていくことが大切だという事を改めて感じました。また、アレルギー児

に対してだけでなく、他のすべての子ども達の連絡ノートも同じように保護者

の気持ちを受け止めながら書いてく大切さを再確認しました。

保護者とは単に食事の話だけをするのではなく、普段から園での様子、家庭

での様子等をお互いに伝え合い、その事によって信頼関係を築くことでより良

い関係を作っていき、子どもたちにとってより良い方向に進むことが出来るよ

うに保護者と一緒に考えていきたいと思います。

T君自身と保護者との関わりについてこの機会に再確認させていただいた事

で、食事について、また、保護者との関わりについて考える良い機会になった

と思っています。

特別配慮食を必要とするだけでなく他の子ども達に対しても同様に保護者と

の関係を大切にし、個々の様々な事に関して保護者と保育士が繋がりを持った

上で、他のクラスの職員、厨房の職員など保育園全体でしっかり話をしていき

連携を取りながら一人ひとりの成長を大切に見守っていきたいと思います。

[参考文献]

これで安心幼児食大辞典　　太田百合子監修　　成美堂出版

新小児栄養学　　井上義朗編　　南山堂

心が通う保護者との接し方　　矢吹秀徳著　　成美堂出版

『保育者の役割』～子ども、保護者、職員から学んだこと～

下田部保育園

保育士　加藤　里奈

**[はじめに]**

私が下田部保育園で働かせていただくようになってから、4年半が経とうと

しています。1年目は先輩保育士の下で0歳児の担任をさせていただき、乳児

保育の基礎を学びました。2年目は引き続き0歳児クラスの担任をさせていた

だき、3年目は3歳児の担任をさせて頂き初めての幼児クラスを経験しました。

現在は2歳児の担任をさせていただいています。

下田部保育園は保育目標として「あかるく　ただしく　たくましく」子ども

たち、保護者、職員が手を取り合い、共に笑い、共に助け合う「やさしさとた

のしさのある保育」を目指しています。現在、下田部保育園では１７５名の子

どもたちをお預かりしています。

近年、社会の変化により家庭を取り巻く環境も変化しています。少子化、共

働き家庭や一人親家庭の負担や不安、孤立感の増加により、家庭機能の低下や

養育機能の変化が見られます。そのため、従来育ちの場の基本であった家庭の

役割が保育所での新たな役割に変わりつつあります。今、保育所に求められる

新たな役割とは、地域における子育ての核となり、多様な保育ニーズに応え、

子育て、親育ちの支援を行うことと考えます。保育所、保育者の役割を考える

と共に、私が今まで取り組んできたことを振り返りながら、自分自身の保育者

としての役割を考えていきたいと思います。

**1年目「日々の業務に追われる保育」**

1年目の私は先輩保育士の下で0歳児の担任をさせて頂きました。それまで、

私は実習での経験も幼児クラスのみで、0歳児の子どもたちと関わった経験が

ほとんどありませんでした。大学で乳児保育を学んでいたものの、資料や本な

どで学ぶことと実際に働くこととは、想像よりも遥かに違うものでした。毎日、

業務に追われるばかりで、仕事を早く終わらせるにはどうすればよいのかや先

輩保育士に迷惑をかけてはいけないなど業務のことばかり考えていました。そ

んな日々の中で気付いたことがあります。

**事例:言葉を話せないからこそ**

私が1年目の0歳児クラスは、１３名そのうち障がい児ユ名のスタートでし

た。その日もいつもと同じように私の前に乳児椅子を並べ子どもたちに給食の

援助を行っていました。そして、Aくんのお母さんがお迎えにこられました。

お帰りの準備を行い子どもをお渡ししました。すると、お母さんが「こんなと

ころに(ほっぺ)傷があるねんけどどうゆうこと？」と質問されました。私は

驚くとともに「あれ?なんでこんなところに傷ができているのだろう」などと

的外れな言葉を返し、保護者の方に不安を与えてしまいました。その様子をす

ぐに先輩保育士が気付いてくださり、「お母さん、すみません。今日いちごを給食で食べたのでほっぺにいちごがついてしまったのかもしれないですね。ちょっとまってください」と笑顔で声をかけ、すぐにおてふきでほっぺを拭くときれいにとれました。その様子に、お母様は「本当だ。よかった。すみません。

初めての保育園で、不安で・・」とおっしゃっていました。その言葉に先輩保

育士は「保育園が始まったばかりで不安ですよね。何かお気付きになったこと

や不安なことがあればいつでも声をかけてくださいね」と声をかけ、お母様も

安心した表情で降園されました。

この事例で先輩保育士は、給食のメニューもAくんの1日の様子も把握し、

自信を待って傷ではないことを確信できたのではないかと考えます。そしてお

母様に対する声かけにおいても気持ちに寄り添い、不安な気持ちを共感すると

共に、次に繋げた声かけを感じることができました。その点、私は、給食もた

だ食べさせているだけで、業務に追われ子どもの様子を把握できていないこと

がわかります。そして、保護者に対する私の声かけは、1日子どもと過ごして

いるのに「わからない」と答えれば、子どもを見てくれていないのかなという

不安な気持ちを保護者に与えてしまいます。子どもと楽しく接しなければ、何

も見えてこないことや、保護者の方と成長を共感できない事に気付きました。

それから、業務だけではなく子どもとたくさん関わる時間を大切に持ち、0歳

児の言葉では表わせない思いを感じ取れるよう給食はもちろん、おむつ交換、

沐浴など触れ合うことで一人一人とたくさんのコミュニケーションを持つよう

に心がけました。(業務を家で持ち帰り行うことも増えましたが、子どものためを思うと苦ではありませんでした)子どもと関わり遊ぶ時間を多く持つことで、保護者の方とのコミュニケーションも増え、些細な成長にも笑いあえるようになりました。この時は子どもと楽しく過ごすことができれば、保護者の方とも信頼関係が築けるのだと考えていました。

**二年目「保護者へのサポート」**

二年目は0歳児担任になり、新しい園舎への引越しなど新しいことに取り組

むことが多くあった一年間でした。私自身0歳児の担任を行うことが2回目の

ため、1年目よりも心の余裕持って子ども、保護者と関わることができ、視野

を広く持てたように感じました。私が1番印象に残っている保護者と共に考え

工夫できたこととは0歳児ならではの離乳食の進め方でした。今までは離乳食

から普通食への移行であったものを離乳食の中でも前期、中期、後期に分ける

ことで、子ども一人一人にあった離乳食が提供できるのではないかと園長先生

という内容でした。事情を説明した所、「うちの子がうそを言っているのですね」と言い電話をお切りになられました。次の日改めて謝罪を行うと「昨目は私自身しんどくて、こちらこそすみません」とおっしゃられていました。

この事例からTくんは納得できているように見えても心からは納得できてい

なかったことがわかります。私もTくんの気持ちに気付くことができませんで

した。いつも要求を伝えているせいか、涙ぐんでいるTくんにさえ、「お当番が

したかった」という気持ちに寄り添う前に、「なぜ、お当番ができなかったのか」を伝えてしまっていました。Tくんのお母様ももともと気持ちがしんどくなってしまうことが多く、その日もしんどい表情をしておられたので、事例で起こった出来事をその目に伝えることができていなかったことも原因と考えます。そして、クラスでは、ひとつの行動をみんなで同時に行うことを決めました。例えば、「ごちそうさま」を行うときも子どもの食べるペースは違うため、一人一人にあった配膳の量を考え、みんなで一緒に「ごちそうさま」を行うことや、お当番活動では、子どもたち全員が給食の用意を行い席にっいてからお当番を始めました。すると、今まで「自分が一番」と考えていた子どもも同じグループで遅れているお友達を助けてあげたり、声をかけてあげたりと子どもたちがお友達を思う気持ちを育てるよいきっかけになったと思います。

子どもたちの気持ちを育て、言葉や表情の中に隠れている本当の気持ちを気

付くことで子どもたちとの信頼関係を築くことができ、幼児組を担任すべき役

割のひとつだと考えることができました。

保護者の方に対して、それまで私自身も気を使いしんどそうな表情を浮かべ

ている方には声をかけることができませんでした。しかし、ある研修で「保護

者も社会にでて働いている方がほとんどで、ストレス社会で頑張っている」と

いう言葉を聞きました。その日から、もし仕事で疲れて帰ってきた時にどんな

言葉をかけられるとうれしいかを考えながら保護者への対応を行うと自然と言

葉を選び対応できるようになりました。保育者も人間ですので上手くコミュニ

ケーションが取れない保護者もおられますが、「ストレス社会で頑張っている」

と思うと理解でき、これも保育者の役割だと受け止めることができました。

**最後に**

今までの3年間を振り返り、事例を思い出すことで、自分の思いや目標とな

る保育を見出すことができました。1年目では、保護者とコミュニケーション

を取るためには業務にばかり追われずに子どもに目を向け、向き合うことを学

び、2年目では、子どもに目を向ける中で見えてくる保護者への子育て支援や

サポートに気付きました。3年目では乳児と幼児の保育の違いに戸惑いながら、

その中で見えてくる保護者の社会における立場やみんなが「ストレス社会」で

頑張っていることに気付きました。これらの経験の中で、子どもの育ちに目を

や栄養士と共に考えました。保護者の方に家での様子を聞きながら少しずつ離

乳食をすすめることで、共に成長を喜ぶ実感を持つことができました。しかし、

家でなかなか離乳食を進めることが困難な保護者の方もいらっしゃいました。

**事例:「8ケ月の男の子」**

給食にあまり興味がなく、口に入れてもすぐに出してしまう(出てきてしまうに近い)咀囑の方法が分からず、噛む力がない。

咀噛があまり発達しないことが気になり、家での様子を伺ったところ、「ごはんはあげているが自分の食べている物をあげている。(普通食)いつもえづくからこの子はごはんが好きじゃない」と返事が返ってきた。

保護者の方にお話を聞き咀囑の発達理由も納得できました。私はこの時、お

母様の近くに離乳食の進め方を聞いたり、教えてくれる人がいなければなかな

か自分では考えることは難しいのではないかと感じました。そこで、クラスで

話し合い離乳食のメニューや進め方を見やすく小さな本にして、お母様に渡し

ました。その結果、連絡ノートにも今まで食事の蘭に「ミルク」としか記載さ

れていなかったものが、野菜や肉類の離乳食メニューになっていました。子ど

も自身も食べ物に興味を持ち、ゆっくりですが咀囑も上手になりました。この

事例をきっかけに、保育者は子どもを支援するだけではなく、保護者へのサポ

ートも必要であることに気付きました。子どもの様子はもちろん、保護者の方

の日々の様子や変化にも十分に目を向けなければならないと考えます。

**三年目「信頼関係の難しさ」**

三年目は初めての幼児組の担任を経験しました。1年目、2年目と共に0歳

児の担任を行なっていたこともあり、子どもたちと信頼関係を築く前に必要以

上に手をかけてしまったり、要求ばかり伝えてしまっていました。そのため、

子どもたちと信頼関係を築くことに時間がかりました。1年目、2年目を過ご

す中で気付いた「子どもへの関わり」や「保護者へのサポート」を考えながら、

3歳児への保育者の役割をある事例から気付きました。

**事例:「お当番活動」**

3歳児になるとお当番活動が始まります。子どもたちも初めてのお当番活動

が大好きです。その日もお当番の子どもたちに「用意できたお友だちから給食

運んでね」と伝えました。その頃、お当番だったTくんは遊んでいて遅くなり、

用意ができた頃にはほとんど配膳が終わっていました。涙ぐんでいたので、他

のお友だちはお当番のために頑張って自分の用意を終わらせていることと、お

着替えの際に遊んでいたら遅くなってしまうことを伝え、Tくん自身も納得できているように見えました。しかし、夕方、Tくんのお母様から電話があり、「お当番活動をうちの子だけやらせてもらえないといっているがどういうことか」

向けるとともに保護者への子育て支援を行うためには、全ての要求を受け入れ

るのではなく、保護者の気持ちに寄り添えるようなサービスを提供していきた

いと考えています。現在、2歳児の担任を行う中で、子どもたちは1年間の中

でどれだけ成長して、どんな経験を一緒に行いたいかを考えるととてもワクワ

クします。このように思えたことも今までの経験があったからだと考えます。

この発表をきっかけにこれからももっとステップアップした保育を目指し日々

学んでいきたいとおもいます。

参考文献

「仕事がもっと好きになる50の方法」

株式会社船井総合研究所、幼稚園サポートチーム

チームリーダー　石田敦志

「育てにくいこに悩む～保護者サポートブック」

高山　恵子

「保護者も一緒に生活リズム改善ガイド」

聖徳大学短期大学部保育科教授

鈴木みゆき